

---

# 翠惺

水無月レイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

翠唄

### 【Nコード】

N0913X

### 【作者名】

水無月レイ

### 【あらすじ】

400年前ー

江戸時代・春の京都・  
陰陽師と姫・

そして、現代にわたる妖怪の争い・  
「清・明・様・清明・さま」

「私はお前のために戦う・」  
誰よりも守りたい・この気持ち・

「大好きです・・・」

第一幕「春の香りと、冬の闇・・・」

400年前・・・

江戸時代・・・春の京都・・・

桜印の名家・・・

「清明様・・・今日も、桜ひなせが美しいですね。」

「そうだな・・・。燈ひなせ? 惺・・・」

私は、燈? 惺、京都の姫・・・。

清明様は、妖怪を払う陰陽師で「桜印清明」・・・。

清明様はほんとうにお優しい・・・。

時は過ぎ・・・冬になった・・・

京都の奥底の暗い闇の中・・・

「桜印のやつらを・・・叩きのめすときが来た・・・。」

「われら妖怪の時代だ・・・。」

「これからが、われらの時代だ・・・。

行くがよい・・・妖怪たちよ・・・。桜印家のものはすべて皆殺し

にしる！」

「ははー炎舞様。」

炎舞はにやりと、わらった・・・。

妖怪たちが炎舞とやらに、おじぎをし・・・

京都の町へ出た・・・。

その頃、清明たちは・・・。

「清明様・・・どうするのですか・・・。」

と一人の陰陽師が清明に焦りながらいった・・・。

「清明様・・・。」

燈？惺は清明を見つめた・・・。

「どうするんだ！！西のほうから妖怪が攻めてきてる  
そうじゃないかっ！！」

もう一人の活発の口うるさい方の陰陽師は

清明に文句をいう・・・。

清明なにも、言わない・・・。

「くそっ！、どうすれば、・・・。」

その部屋にいる、陰陽師ほとんどが、手を握り締めて、  
唇をかんだ・・・。

そうすると、清明がいった・・・。

「やつらを、倒す・・・。」

清明は、決心をした。

「倒すって・・・分かってているのか・・・清明！」

相手は百鬼いるぐらいなんだぞ！！いや・・・もっというかもしれ  
ないのに・・・

何を言うんだ・・・！！

「では、このまま見ているというのかっ！！」

清明のそのときの顔は、少しこわかった・・・。

それに圧倒されたほかの陰陽師は清明に従うことになった・・・。

妖怪たちは、今日の夜にせめて来るらしいのだ・・・。

そして、時間は流れ、夕日がでて、向こう側の空からは  
月がうすくみえてきた・・・。

「清明様っ！！」

燈？惺が総会の部屋で一人になった清明にはなしかけた。

「危険です。おやめください・・・！！」

清明はなにもいわない・・・。

「清明様・・・ダメです・・・。」

燈？ 惺は少し涙目になっていた。

「燈？ 惺・・・私はお前のために戦う・・・。」

私が勝てないとおもってるのか・・・？

清明がやつと口を開いた・・・。

「そうではありません・・・。私は・・・。」

「燈？ 惺・・・私はお前が好きだ・・・。だれよりも好きでいたいと

願っている。だから、お前、燈？ 惺を守りたい・・・。」

好きだから・・・。」

清明は燈？ 惺に行った・・・。

「清明様・・・うつ・・・。」

私はいきなり目がくらんだ・・・。薬か何かでくちを抑えられた・・・。

「清明様・・・。」

「ごめんな・・・。燈？ 惺・・・。」

## 第二幕「白い闇」

目を開けると、暗闇の中だった……。

「ここはどこだろうか」

私は、一人牢獄の中にいた……。

「清明様……っ……ここは……」

私は、白い着物をきたまま、牢獄の中にいた。

周りには、飢えて死にそうな囚人が壁に横たわっていて、

私がいることに気付きもしないぐらいだった……。

「早くここからでないと……。」

牢の外は、やけに騒いでいて、その音が牢に響いていた。

「私は何でこんなところに……。早くでないと清明様が……」

っ

私は不安のあまり一晩眠りについてしまった……。

……。なにがおきたかも……知らずに……

起きたときは朝になっていた……。

囚人たちは、昨日と変わらず壁に横たわっていた……。

私が牢からでようとしたその時、向こうの階段から足音が聞こえて

きた……。

「詰まらんな……この世は……」

……だ、だれなの……

私はこっそと、壁の方から、階段の方をみつめた……。

「ん……？」

目があつてしまったような気がした……。

声の感じからすると、男のようだ……。

しかし、男の周りにもたくさんの方がいるようだ……。

どンドン、牢の方に近づいてくる……。

私はとにかく焦った……。きつと様子から見ると、清明様が言って

いた

妖怪の百鬼であろう・・・。

・・・どうすれば・・・

ドサツ

そのとき私は誰かに押し倒された・・・。

えっ・・・

「何だ、囚人か・・・詰まらん、殺せ。」

男は隣にいた側近に命じた。

そうすると、側近は弓を取り出し、囚人の背をめがけて矢をはなつた・・・。

矢を放つた後、男たちはそこから去つた・・・。

けれど、その男は明らかにわたしにきづいていた・・・。

男は最後に、私を見つめて「またあおうぞ・・・。」といって、行った。

「大丈夫でございましたか・・・。」

矢を打たれた囚人は私を守ってくれたのだ。

「なぜ・・・私を・・・」

私は何故自分が助かってしまったのだろうと思わずにはいられなかった・・・。

「あなた様は私たちが罪を犯しても、大切にしてください・・・た・・・そのご恩を・・・今お返しできて・・・ほんとうに・・・よか・・・つた・・・。」

囚人は目をつぶつたまま、二度とあけることはなかった・・・。

私は目の前で一人の間人を、消してしまつた・・・。

私は何とかして牢をでることができた。

一段一段地上への階段を登っていった・・・。

あたりは一面真っ白で、私以外に誰もいなかった。。。

私は、真っ白雪の上を走った。

少し進んだところに、兵がいた。

「あの．．．いったいどうしたのですか．．．。

．．．．えっ．．．．いやっ．．．．」

その兵は死んでいた．．．。

その向こう側をみると、雪の上は赤く染まっていて、兵が何人も倒

れていた．．．。

「晴明様っ．．．．．」

私は、すべての場所を探し続けた．．。

すべての場所を．．．．．。

最後に行った場所．．．．桜の木の場所．．．。二人の場所．．．。

「．．．．はあ．．．．はあ．．．．」

私は走り疲れて息切れがひどかった．．。

私は立ち止まった．．．．．

「．．．．晴明．．．．様．．．．晴明様．．．っ!!」

私は白く染まった桜の木に横たわる晴明に駆け寄った．．。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0913x/>

---

翠惺

2011年10月30日03時21分発行